

ロゲイニング世界選手権

2006年10月13~14日

(オーストラリア)

TEAM 阿蘭梨
安齋秀樹

オーストラリアの台地を 24 時間かけて巡る。

こんな広大なスケールのロゲイニング世界選手権に日本から初挑戦し、19 位という好記録を出した。

日本からは初出場

2006 年 10 月にオーストラリアのニューサウスウェールズ州、ワランバングル国立公園で開催された第 7 回ロゲイニング世界選手権に、柳下大と共に参加してきました。世界選手権は 2 年に 1 度、発祥の地オーストラリアとヨーロッパと北米が持ち回りで開催されています。今回は他に岡部さん、松本さんのハッピートレイルチームが参加しましたが、日本からの参加は今回が初めてとなります。

広大な競技エリア

会場となったワランバングル国立公園は、シドニーから北西へ 600km ほどのところにあります。グレートディバイディング山脈の西端に位置し、ここから西は広大な大鑽井盆地が広がります。かつての造山活動で生成された火成岩が長年の侵食により地表に露出し、巨大なガケや奇岩が並ぶ異様な光景が見られます。



植生や生息する動物はオーストラリアでは特に珍しいものではないようです。多種の樹木からなる混交林で、乾燥した地域であるため下草はとげのあるものが多かったです。レース中にはカンガルーやワラビー、エミュや大トカゲも見ることが出来ました。コアラは見えませんでした。ユーカリが一面に広がっていたのでどこかに居たはず。また、最も近い街から 35km 離れており、見晴らしも良く空気も乾

燥していることから標高が最も高い山の山頂には天文台もありました。実際レース中に想像を絶するほどの満天の星を見ることになりました。



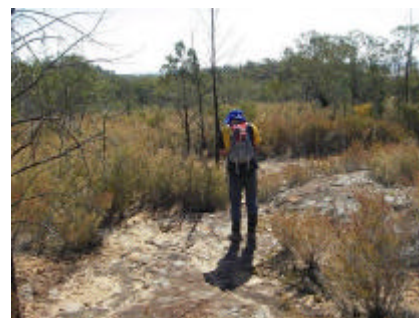
競技エリアはこの国立公園の中心部の大部分を占める、南北 20km、東西 20km の範囲で、地図の縮尺は 33333 分の 1 (3cm=1km)。地図は日本で言う国土院発行の地形図を基にしており、地図から得られる情報は地形と水系、道路の情報と森か牧草地などのオープンかの区別だけです。オリエンテーリングの地図が競技者の視線で作られた地図であるのに対し、ロゲイニング競技の地図は空から見た情報で描かれているところがポイントです。



大会に向けての準備

世界選手権に参加したいと考えるようになったのは、2 年前の菅平での大会の時でした。パートナーの柳下は国内でロゲイニングと名のつくレースで無敗、私と初めて組んだレースでもお互いストレスなく完璧なレースが出来、活躍の場を世界に求めるのは自然の流れでした。ただ、この後二人とも相次

いで故障し、昨年の菅平大会では途中棄権、今年に入ってからも 2 人とも完璧な状態の時期はありませんでした。私自身、故障が癒えてからかなり不安を残したものの、9 月末の八ヶ岳縦走トレーニングで自分に課した課題をクリアできて、かなり自信を持つことが出来ました。この縦走中、別の登山道から登ってきた柳下とばったり会いました。お互いこの日に八ヶ岳に来ているということは知らなかったで、かなり驚きました。この時ばかりは切っても切れない関係の素晴らしいコンビなのではないかと本気で思ったものです。余談ですが、故障していた箇所もほとんど同じ場所なのです。身長・体重・靴のサイズももちろんほとんど同じです。



柳下はこの翌週、つまり世界選手権の 6 日前に山岳耐久レースに参加しました。このレースは柳下が毎年挑戦しているレースで、今年たまたま世界選手権と近い日程になり過酷なスケジュールになったものの、このような挑戦は素晴らしいことだと思うので、私も喜んで応援しました。もちろん、柳下が 72km くらい走っても故障することはないし、1 週間で疲労を取ることは出来る、負荷のかかり方も違うから十分対応できるだろうと思ったからです。(ところが実際は、古傷の膝を痛めてしまっていたようです。)

私は 8 月末からほとんど毎週土曜日にアルプスに出かけていました。夜中の 12 時に家を出て、昼間は山岳地帯を歩き回り、深夜に帰ってくることが出来ました。平日は補強以外のトレーニングはせず、体重も 1.5kg 増えて、ロゲイニング競技仕様の身体にすることが出来ました。そんなわけで、柳下が山岳耐久レースを走っているときには、十分に休養し疲労回復に充てることが出来ました。

会場はキャンプ場

私はレース前々日にシドニー入り、翌日の長距離ドライブに備えてゆっくり休みました。松本さんと柳下とメルボルン在住の岡部さんがレース前日朝にシドニー入り、レンタカーで会場に向かいます。いくつか山地を超えるルートのため、予想以上に時間がかかり会場そばの街クーナバナプランのホテルに着いたのは20時近くになっていました。翌日、会場となっているキャンプ場に入りスタート3時間前の9時に受付。ちょっとばたばたした行程になってしまいました。

会場のキャンプ場には参加者のテントがぎっしり並べられていました。参加者は前日からレース終了の翌日までキャンプをすることが出来ます。食事は主催者が用意してくれます。参加者の中には競技者というより家族や仲間と一緒にキャンプを楽しみながら参加する愛好者も結構居て、彼らはレース中も眠くなったらテントに戻ってきて寝るようです。さすがに私たちはレース前日にテント泊は酷だろうということでホテルを取ったのです。ただ、大会の雰囲気をしっかり味わうために、わざわざ日本からテントを持って行き、レース後はテント泊にしました。

受付の後、地図を受け取りました。地図はスタート3時間前に配られます。大勢並んでいたのでもっと時間を遅らせて取りに行きました。そして地図を見て作戦会議。回り方だけでなく会場（ハッシュハウス）には戻るかどうか、戻るとしたら何時ごろにするのか、給水所はそれぞれ何時ごろに通過するか、それらを決めたらスタート時の持ち物はどうすればよいか、テントにはどんな持ち物を用意して置けばよいかを決めることが出来ます。それらを決めた上でパッキングを始められます。



初挑戦で19位！

24時間は初めてで大体のまわり方を決めたものの実感がわかず、夜中にハッシュハウスに戻ることに、かなり暑くなりそうなので、水を多めに補給していこうということを決めてスタート

となりました。

スタート直後はトレイルを使った登りのレグ。トレイルからコントロールにアタックする距離も長くはなく、初めてのトレイルで初のレースの導入にふさわしい回り方でした。私自身は状態が良かったので、トレイルは走っても良いかなと思いましたが、柳下が最初は歩く、と言っていたのでまったく走らずに早歩きで進みました。女性や年配の方でも背が高い人が多いので、私たちが早歩きしてもどンドン追い抜かれました。それでも不整地やアタックでは早く進むことができ、自分たちが速いのか遅いのかまったく分からないまま淡々とレースをこなしていきました。森の中は八工が多く立ち止まると目や口をめがけて飛んでくるので、かなり参りました。

ヤブが思っていた以上に多く、足場もガレ場が多く、地図で読む以上に時間がかかり、疲労も蓄積されていきます。レース中に気づいたことは、ロゲイニング競技は地図を見て予定を立て、それを実行することで体力の限界に挑戦しナビゲーション能力を競う競技、というだけでなく、地図には隠れない情報（主にヤブ）によって予定を遂行することが困難になった場合に予定を的確に立て直していく状況判断が必要な要素になっているということです。後で聞いたところによると、そのためにヤブ漕ぎもする必要があるようにコースを設定しなければならないようです。

2時間ほど経過すると、トレイルにも地図にも対応でき、ヤブや足場の悪いところがあっても文句を言いながらも対応し、45分に1つくらいの割合でコントロールに到達しながらのレースに慣れてきました。そして、6時を過ぎると急に暗くなり、気温も下がってきました。最高気温は35度近くまで上がったものの（日なたはもっと上がっていたはず）最低気温は10度を下回る予報になっていました。ここは盆地状だからもっと寒くなるに違いありません。ヘッドライトを装着し、寒さを感じたらすぐに止まって着替えることにしてレースを進めました。

牧草地に出たときには満天の星に驚きました。星が音を立てて降って来そうだというのは、こういうことを言うのかと感じました。南十字星の5つの星の間には数え切れないくらいの星が輝き、天の川は液体のよう、それを横切るように流れ星がいくつも流れていきます。突然の来訪者に道端で寝てい

たカンガルーが驚いて闇の中へ逃げていきます。そして、存在感のある月が東の山の端から上がってくると、暗い星が消え星座が見事に浮かび上がってきました。レースをしていることが信じられないくらい、本当に夢のような空間を歩き続けました。

寒さが最も厳しくなっていく3時前にハッシュハウスに帰ってきました。ここで、主催者の用意したご飯を食べました。これにはかなり助けられました。高得点を狙うだけなら休憩に時間はかけられないのですが、本場のロゲイニング競技を楽しむならハッシュハウスを利用すべきだと思っていたので満足でした。

そして日の出、一気に気温が上がリ、嫌な八工たちも活動を再開してきました。レース終盤に差し掛かった頃、想定以上に時間がかかったのでルート変更をしたのですが、さらにトリッキーなコントロールを見つけるのに時間がかかり、広大な牧草地を歩いているうちに、私が暑さでふらふらになってしまったので、最後はコントロールを飛ばし時間を余らせてのゴールとなってしまいました。100%のレースではなかったのですが、初めての挑戦としては満足できるものでした。

会場で他の選手の様子を窺うと、やはりこのトレイルはヤブやガケのような斜面と足場の悪さのせいでかなり苦労した人が多かったようです。松本さんと岡部さんのゴールの後、食事を取って落ち着いた頃に成績発表、驚いたことに参加311チーム中、19位となっていました。トレイルもヤブも苦しまれましたが、結果的にはうまく対応できた方だったのでしょ。自分たちが経験してきた一連の手続きの方法も間違っていなかったと感じることが出来ました。もちろん、ベストのレースが出来れば10位以内を狙うこともできるのではないかという感触も得ました。本当に実りの多いレースを体験することが出来ました。

日本でロゲイニング競技の普及を図り精力的に動いてくださっている高島さんを初め、チーム白樺や菅平の関係者の皆さん、今回私たちのチームにシューズとノースフェイスのウェアを提供してくださったゴールドウィン田口様、また声援をくださいました多くの方々はこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。また、次のステップに向けて頑張っていきたいと思います。（安齋秀樹）